

「北海道みらい日誌」最優秀賞受賞作品

テーマ 1 「生活・安心」最優秀賞

顔を上げて・・・

北海道札幌稲雲高等学校 1年 中川 翔真

北の大地「北海道」に住む私が今、感じていること。それは北海道愛だ。

私は、大自然の中で味わう涼しい風が大好きだ。歩道に停まっている車の排気ガスよりも・・・。私は、山道をドライブしている時に見かける狐の愛らしさが大好きだ。動物園で見るコンクリートの上のレッサーパンダよりも・・・。田舎で立ち寄るフリーマーケットが好きだ。右手に持つスマホで検索するネットオークションよりも。

今、グローバル化が急進している。それは、大都会だけではなく、ここ北海道でも同様だ。私の地元札幌の駅で周囲を見渡すと、顔を上げている人はほとんどいない。皆、一様に首を下げてスマホの画面に夢中だ。若者だけではない。子どもも大人も年配者も、目の前の半径1メートルしか見えていない。

顔を上げて見てみよう。北海道は広い。北海道の大きさは私達の誇りだ。だからこそ私は、大好きな自然溢れる北の大地を、この広い北海道全体で守っていかなければならないと思っている。街中には、スーパーやコンビニが全国共通の様相で目に入る。しかし、北海道発祥のコンビニエンスストアや菓子メーカーや家具店が地産地消を売りにしているように、北海道には北海道の生きる道があると思う。広い広いこの大地をしっかりと見つめてみよう。利便性ばかり追求するのは道産子らしくない。広い大地で培われた大きな度量で道産子一人一人がつながりあえたら、北海道の魅力はもっともっと日本全国、そして世界へと発信できるはずだ。

150年の歴史は浅いのかも知れない。それでも、ここ北海道が目指す「みらい日誌」には、相も変わらず、徒歩と車、野生動物と飼育動物、便利と不便がうまく共存した姿を描いてみたい。10年後も50年後も、私達の隣には当たり前のように大自然が息づいていますように。謙虚な気持ちで北の大地とともに生きていきたい。

テーマ2 「経済・産業」最優秀賞

将来の夢 ～私、農家になりたい～

北海道富良野緑峰高等学校 2年 坪井 古都未

「農家ってさ、汚れるし、儲からないし、疲れる。それに、虫だって気持ち悪いじゃん。農家なんてやっても良いことなんてないよ。」これは私が小学生の頃、友達に言われた言葉です。この言葉を聞いたとき、とても腹が立ったことを覚えています。私の両親は中富良野で農業を営んでおり、私も小さいころから作業を手伝い、両親の働く姿を見ていたため、そんな友人の言葉が嫌でした。農業をやってみたい、父の代で終わらせたくない。そして、「皆に農業をもっと知ってもらいたい。」と考えはじめました。

そんな思いから、富良野緑峰高校に入学し学んだことが3つあります。1つ目は、農業は作物を生産するだけではない。加工・販売をすることも大切だ、ということです。今まで私は「作物を栽培する仕事が農業だ。」と思っていましたが、販売会や食品製造の授業を通して、農業に対する見方が変わりました。

2つ目に、以前の私は、「農業は、生産する技術を学べば良い」と思っていましたが、その生産する技術を支える土台として、土壌、機械、肥料の知識も必要であり、今後は、経営についても大切だと学びました。

3つ目は、先生から教えて頂いた、オーストラリアで農業が人気な理由で、「大好きな家族と1日中一緒にいられるから。」ということ。私は、この考え方が、前向きで素敵だと思いました。物の見方や考え方は、人それぞれで、それまでの農業に対する見方が変わりました。

しかし、まだまだ男性のイメージが強い農業ですが、今、女性の農業者も増えており、その1人に、安丸千加さんがいます。安丸さんは、曾祖父の代から続く上富良野のメロン農家で、富良野緑峰高校のOGであり、道立農業大学校を卒業し、20歳で就農しました。現在は、「はらぺ娘」という、女性農業者によるネットワークの代表も務めており、その活動は、昨年TVドラマ化されました。私は、こんな身近に、農業に取り組んでいる女性がいた事に、とても嬉しくなりました。そして先日、専攻班活動で、安丸さんとお話しできる機会があり、心に残った事があります。まずは、「農家をやっていて、女性だから困ったことは？」という質問に、迷うことなく、「力仕事です。」と答えたことです。「力では父にかないません。それ以外で困ったことはないですよ。」女性だから困ることは沢山あるだろう、と考えていた私は、自分も知らず知らずのうちに農業を男性の仕事と思い込んでいたことに気が付かされました。その後は、農業の魅力や親子対象食育講座で野菜嫌いの子が、取れたてのピーマンを美味しそうに丸かじりした話。そして、進路相談にまで乗っていた

だき、素敵な時間があったという間に終わり、最後は「今はもう、性別で仕事を選ぶ時代じゃない。ぜひ、頑張ってください。」と応援していただきました。これらの話を聞き、女性農業後継者は珍しいものではないと感じ、私も安丸さんの様に、自分で栽培した作物の良さを、消費者に伝えられる農家になりたいと強く思いました。そこで、私は、将来に向けて2つのプランを考えました。1つ目は、消費者に自信を持って販売できる「安心・安全」な農産物を目指した、減農薬栽培です。確かに手間もかかりますが、田んぼで蛙が鳴いている風景も、土の中にミミズがいる事も趣があり、その素朴な風景も農業の魅力とすることが出来ると思います。また、以前授業で、有害生物の防除方法は、大きく4つあることを学びました。農薬を使う化学的防除。天敵利用などの生物的防除。マルチや防虫ネットを使う物理的防除。輪作などの耕種的防除です。私は、化学的防除以外の方法を上手に利用し、さらに、生態系に存在する天敵生物などの自然制御機能を有効に活用し、経済的に被害が生じないレベルに発生を抑える、総合的有害生物管理、通称IPMという考え方を取り入れたいと思います。2つ目は、生産だけでなく、6次産業化にも挑戦します。では、6次産業化に大切なことは何だろうと考えました。加工品を作る知識や技術もそうですが、一番はやはり、美味しい原材料を使うことであり、美味しい農産物を生産する技術です。また、「多くの人に農業のことを知ってもらいたい。」との思いから、6次化することで多くの人と関わる機会ができ、その人たちに「農業って、こんないいところだってあるんだよ。」と、農業に対するイメージを少しでもプラスに変えていきたいです。

将来この北海道の大地で農家になりたい。この夢の実現に向けて、残された学校生活で勉強を頑張りたいと思います。授業はもちろん、農業以外の部活動や普段の生活も勉強だと考えます。沢山の人と交流することで、多種多様な意見や考え方を知り、受け入れ、自分の物の見方を変え、多くの視点を持つことも大切だと思います。

そして、高校卒業後は、さらに高い技術と、農業経営に必要な知識を学ぶために、道立農業大学校への進学を考えています。

将来、中富良野に戻り、4代続く我が家の農業を父から受け継ぎ、いつの日か、私の子どもが友達から「農業って、すごく良い仕事だよ。」と言ってもらえる農家になります。

テーマ3 「人・地域」最優秀賞

武四郎の夢

北海道札幌国際情報高等学校 2年 山岸 志穂

「蝦夷地に北加伊道と名付けた。」これが私の知っていた松浦武四郎でした。しかし、武四郎について調べていくうちに、彼の功績はそれだけではないことがわかりました。

武四郎は、若い時から日本中を旅していました。蝦夷地探査には特に多くの時間を費やし、アイヌ民族と交流しました。彼が持っていたチャレンジスピリットや多様性への理解からは、現代の私たちにも学ぶべきものがあります。

グローバル化が進む今、国際社会で活躍できる人材「グローバルシチズン」の育成が求められています。より高度な語学教育や情報教育の必要性が叫ばれていますが、本当に必要なのは、武四郎のような志を持ち、それを実現しようとする勇氣ある「人」ではないでしょうか。

知らない土地に臆せずに出向こうとする、チャレンジスピリットは世界に挑むうえで必要です。蝦夷地という「異国の地」で、アイヌ民族という「異文化の人々」と打ち解けるコミュニケーション能力は、異国間の交渉に必須です。

何よりも一番大切なのは多様性への理解でしょう。武四郎は、アイヌ民族と交流していくにつれ、自然や命を大切にするアイヌ文化を尊敬するようになりました。当時は、アイヌ文化を遅れた文化とみなす風潮があり、武四郎の考えが理解されることはありませんでした。

様々な民族、宗教、文化が入り混じっているこの世界、自らの価値観を押し付け、その他の考えを否定する人が少なくはないように思われます。しかし、このような差別的な考えでは、相手を見下し、全うに人間関係築くことなどできません。だからこそ、多様性への理解が不可欠なのです。

「アイヌ民族・文化の保護と尊厳の回復」

北海道開拓の判官であった武四郎が持ち続けた夢は、未だ実現しているとはいえません。しかし今後、武四郎のような志と実行力を持った若者が次つぎと現れれば、近い将来、彼の夢は実現されることでしょう。そして、北海道からグローバルシチズンと呼べる多くの人々が世界に向けて羽ばたき、北海道の素晴らしさを各国の人々に伝え広めていくことも遠い未来の話ではないでしょう。